

Title	生産的及び不生産的なる語に就て ( 四 )
Sub Title	
Author	榎本, 鈺治
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.10 (1924. 10) ,p.1478(110)- 1499(131)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19241001-0110">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19241001-0110</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

て、頭の哲學ではないのである。今日吾我は、此の「腕の哲學」の最も完全なる表現を革命的サンズカリスムのうちに發見する。吾我が此の運動に與へ得る「サンズカリスムの哲學」といふ呼稱は、多分の曖昧な意味を含んでゐる。簡短な社會主義といふ言葉より非常に明瞭な此の呼稱は、そこから出たのである。一方では、主知説との對當に於けるベルグソン哲學の研究、一方では、デモクラシイの社會主義との對當に於けるサンズカリスムの社會主義の研究、要するに其處にソレル學説の獨創性を理解するために明かにしなくてはならない二つの點がある。此の二方面の研究は、吾我をして吾我が現代の最も深いと同時に最も狂はしい精神の一つに直面してゐるといふ考を固く抱かしめるであらう。

### 生産的及び不生産的なる語に就て(四)

榎本 鑛 治

十九

前號に叙述せる所は、アダム・スミスの生産的及び不生産的勞働説、之に對する佛國スミス派經濟學者の難點、其の難點に對する解説、及びスミス説に對する一二英國經濟論客の批評の大要であるが、之と同時に吾々は更に、所謂英國正統派經濟學に屬する有力者のスミス説に對する態度を知る必要がある。

先づジェイムス・ミル (James Mill) の著書を参照するに、かの農業のみ生産的なりと主張せるよりして純然たる「*プロダクティブ*」と稱せら

る「*ウィリアム・スペンサー* (William Spence) の見解に反對して、彼が一八〇八年に公表せる「商業擁護論 (Commerce Defended: An Answer to the Arguments by which Mr. Spence, Mr. Cobbett, and others have attempted to prove that Commerce is not a Source of National Wealth, 1808)、及び次で彼が一八二一年に公刊せる「經濟學要論」(Elements of Political Economy) の何れに於てもジェイムス・ミルは生産的勞働及び不生産勞働に言及しなかつたのである。去ればミルは明かにアダム・スミスの生産的勞働説を是認せるものである。現に前者の一節に曰く「遊樂用の犬馬、及び一般奴婢は何物をも生産せず」也。(Commerce Defended, p. 69)

居る (J. Mill, Elements of Political Economy, 1821, p. 182.)

然るにミルは、生産的及び不生産的なる語の用法を擴張して、生産的消費及び不生産的消費 (productive and unproductive consumption) なる區別を試みたのである。既に紹介したる所に依りても知らるゝ如く、アダム・スミスは生産的勞働及び不生産的勞働なる區別に就ては反覆繰返したるも、生産的消費及び不生産的消費なる語を用ひたる所は一も見當らぬ。恐らくスミスには其の必要が起らなかつたのであらう。即ち(イ)總ての消費、換言すれば収入としての富の使用は總て富の破壊にして、毫も富の生産に非ず、及び(ロ)從て不生産的消費の對語として必ず包含せらるゝ如く見ゆる所の生産的消費を論ずるは正に用語上の矛盾なりと、考へたるアダム・スミスは正當である。然らばスミス以後ジェ

其の他ジェイムス・ミルは、其の「經濟學要論」中にも公然と、スミス以來唱へらるゝ生産的及び不生産的勞働説を是認せる言辭を示して

ム・スミスは正當である。然らばスミス以後ジェ

イムス・ミルに至る迄生産的消費及び不生産的消費なる語を用ひたる英國の經濟學者ありや否や、私は之を充分に知らぬけれども、先づジェイムス・ミルを以て是等の術語を使用したる最初の英國經濟學者となす可きであらう。然るにスプーンナーは然かならずして、其の子ジョン・スチュアート・ミルを以て最初の使用者と斷じて居る。(Palgrave, Dictionary of Political Economy, 1918, vol. III, p. 600, written by Rev. W. A. Spooner) 年代順に云へば是れは全然誤謬である。即ちジョン・ミルの二著が公刊せられたるは、ジェイムス・ミルの「經濟學要論」に遅ること正に二十四年 (Essays, 1844) 乃至二十八年 (Principles, 1848) であるからである。唯だ此の場合に多少なりともスプーンナーの所言に裏書する點ありとすれば、夫れはミル父子の中孰れがより多くの影響を後代經濟學者に及ぼしたる

出せらるるものを指して生産的消費と云ふのである。生産的消費の中には次の三種の物件が含ませられる。第一は労働者の必需品である。此の中には労働者が其の賃銀に依り消費し得るものは、悉皆包括せられて、而も其の消費物件は彼の生活維持に必要なものに限ると、將又何等か享樂に資せらるるものたるは、之を問はないのである。第二は機械にして、此の中には各種の道具、生産的作業に必要な建物、及び牛馬等をさへ包含するのである。第三は物品の生産に欠く可らざる原料である。例へば小麦の種子、羊毛、染料、石炭等の如し。

是等三種の物件中第二種類の消費のみは、生産的作業の行程に完全に實現せられない。即ち生産用の機械及び建物は、通常數年間も繼續使用せられ得るからである。乍併労働者の必需品

やの事實である。其の點より云へばジョン・ミルのジェイムス・ミルに優れることは衆知の事實なるが故に、ジョン・スチュアート・ミルを以て生産的消費及び不生産的消費なる術語の最初の使用者たらしめ得ないでもない。併し夫れにしてもスプーンナーは、詮索不十分なる譏りを免れ難い。

然らばジェイムス・ミルの生産的消費及び不生産的消費は如何と云ふに、大要左の如くてある。消費は二種に區別せられる。生産的消費及び不生産的消費即ち是れである。

(甲) 何物かを生産するがためには、一定の支出が必要である。即ち其の必要條件は、(イ) 労働者の維持、(ロ) 彼の労働に適應せる道具の給與及び(ハ) 彼の生産す可き物品の原料の提供、是れである。斯の如く或る物件の生産のために支

及び第一次的たるを第二次的たるを問はず生産せらるる可き物品の原料は、悉皆完全に消費せらるるのである。勿論永續的機械にしても其の破損磨滅は部分的消費に相違ない。

(乙) 斯の如く人間は生産のために消費するのである。乍併或る者は、何物をも生産せずに、又何等生産の目的を有せずに消費するものである。例へば人が耕作夫に支拂ふ賃銀は生産のためである。然るに同一人が從僕に支拂ふ賃銀は生産のためではない。又製造業者が亞麻を購買して亞麻布を製造するは、生産的消費なれども、同一人が葡萄酒を購買して之を飲用するは、不生産的消費である。是等の實例に依れば、所謂

不生産的消費の意義は自ら釋明せらるるのである。即ち不生産的消費とは、等價値のものが其の消費と共に生産せらるる可きが如き目的に資せられざる一切の消費を云ふのである。

此の説明の結果は、生産的消費其物が一個の生産的手段であると云ふこととなる。然るに不生産的消費は生産的手段ではない。換言すれば斯る消費は目的である。勿論享樂も作業遂行上の動機を構成するに役立つものである。

更に右の説明の結果は、生産的消費に依て何物も失はれずと云ふこととなる。換言すれば個人に取ても將又社會に取ても何等財産上の減少を來たすものではない。何となれば假令一物は破壊せらるゝからである。然るに不生産的消費の場合、之と全然異なるのである。即ち不生産的に消費せられたるものは悉皆失はれる。換言すれば斯の如く消費せられたるものは、悉皆個人に取ても社會に取ても財産上の減少を來たすのである。何となれば此の消費の結果として何物も生産せられないからである。併し財は其の

使用と共に失はれて、其の使用の結果取得するものは、何れも福利であり、快樂であり、満足である。

又生産的に消費せらるゝものは常に資本である。是れ生産的消費の特長にして、特に注目し値する。此の命題の眞理なることは、明白である。例へば或る人が一定の資本を以て織物業を始め、彼は其の資本の一部を賃銀に支拂ひ、他の一部を機械に支拂ひ、又其の殘額を以て原料及び市場獲得の必要上用ふる他物を購入することせよ。然らば彼の全資本は、生産的に消費せらるゝ如く思はれる。更に生産的に消費せらるゝものが何れも資本となることは明白である。何となれば若しも前記の如く生産的に消費せられたる資本を所有する織物製造家が彼の利潤の一部を節約して、之を彼の營業に必要な別種の生産的消費に用ふ可きであるとすれば、夫れ

は彼の資本に依て果さるゝ職能を正確に果すであらうし、又實に其の資本に對する一の附加でもあらう。(J. Mill, Elements of Political Economy 1821, pp. 178-181)

斯く説きたるミルは、次に一國の總年生産に言及した。即ち一國の生産物が一年間に齎したる金額は總年生産(gross annual produce)と呼ばれる。勿論此の總年生産中の大部分は、消費せられたる資本を償ふために、又資本家が労働者の賃銀及び原料の購買に支出せるものを償ふために、更に彼の機械の破損磨滅を償ふために夫々求められる。斯の如く總年生産中より消費せられし資本を差引きたる後に殘存するものは、純生産(net produce)と稱せられる。而して是れは、常に元本の利潤として、又貸子として分配せらるゝのである。

此の純生産は、通常國民的資本に對する總て

の附加のなさるゝ基金である。故に若しも純生産が全部不生産的に消費せらるゝならば、國民的資本は、前年と同額丈け即ち何等の増減もなく殘存するに過ぎない。更に純生産より多額のものがない生産的に消費せらるゝならば、夫れだけ國民的資本は減少する譯である。又純生産より少額のものがない消費せらるゝならば、其の餘剰は生産的消費に役立つ道理である。從て國民的資本は増加するものである。(ibid. pp. 181-182)

勿論斯る區別をなせるジュエイムス・ミルと雖も、末尾に及んで其の正確なるは單に概念構成上に留まつて、實際上生産的消費及び不生産的消費の境界線や生産的労働及び不生産的労働の境界線を正確に設定することは、甚だ困難であると斷じて居る。元來吾々の分類なるものは殆んど總て此の不便に出會ひ勝ちである。而も極端に相違する事物間に於ても、大體知覺せられ

ざる差等に依て夫等の事物を接近せしむ可き順序がある。同様に消費者の場合にしても、又労働者の場合にしても、生産的の部類になり若くは不生産的の部類になり區別し得るやうに思はるゝ場合は、兎に角或る特長を捉へての後である。斯の如き困難を認めながらも尙ほミルは人間の論議上分類を必要とし、又其の境界線の何處かに設定せらる可きことを絶対的必要條件として居る。而して是れは、學問上に於ても又實際上に於ても或る點までは出來ると考へたのである。唯だ此の場合に専ら必要なることは、分類せらる可き對象の主要なる性質が其の種類の定義に明確に適應しなければならぬこと、是れである。然る後に於ては恰かも二種の境界線上に横はつて或る程度迄二種の性質を共有するが如き物件を實際に區別することは、左迄困難ではないと結んで居る。(Ibid. pp. 182-183)

右の大意に依ても知らるゝ如くジェイムス・ミルは、消費に就ても生産的及び不生産的なる區別を試みて、生産的及び不生産的労働の區別と同様に之を主張したのである。即ち此の點に於ては彼は、後述のリカード、マルサス、マッコック等に一步を先んじたる次第である。而して是等の區別は、總て其の子ジョン・スチュアート・ミルが之を採用強調するに及んで、其の極點に達したるは、普ねく知られたる所である。然らばリカードの見解は如何。

二十

ジェイムス・ミルの親友デヴォッド・リカードは「何人と雖も、彼が人間生活上の必需品、便宜品、及び娯樂品を享樂し得可き程度に従て富裕ともなり、又貧困ともなる」と云ふアダム・スミスの定言を是認して、之を其の著「經濟學原理」中に引用せるも、其の他には本題に就て

示しながらも、兎に角アダム・スミスの見解を採用して居る。即ち其の著「經濟學原理」中の「生産的労働及び不生産的労働に就て」なる一節に於てマルサスはスミスの右の區別を支持して居る。今彼の之を支持する理由を示せば左の如くである。

全然口を緘して語らなかつた。(D. Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, 1817, p. 377; 3d ed. in Works, p. 165.) 併し生産的なる語はリカードの「經濟學原理」の各所に見出し得るものにして、例へば第二章第二十七節乃至第三十一節には最も多し。(Ricardo's Political Economy, edited by E. C. K. Gomer, pp. 52-60) 尙ほリカードは其のマルサスに與へたる書翰の一に於ても生産的労働なる文句を用ひ居り (Letters of David Ricardo to Thomas Robert Malthus, edited by James Bonar, 1887, p. 153.) 又他の一に於ては「節約は不生産的支出であらう」と云ふ意味の叙述を用ひ居るも、(op. cit. pp. 186-187) 思ふに其の「經濟學原理」中に於けると等しく單にスミスの用語を踏襲したるものであらう。

之に反してマルサスは、多少不熱心の様子を

せらるゝものと同様に規則正しく消費せらるゝには相違ないけれども、併し夫れは各種の人々に依て消費せらるゝのであると、アダム・スミスは主張して居る。而も斯く主張することは、

許容されなければならぬ。若し是れが事實であり、又節約が資本増殖の直接原因なりと許容せらるゝとすれば、富の進歩に關する總ての論議に於て此の進歩を促進するに頗る重要な役割を演ずるが如く思はるゝ種類の人々をば、何等か特殊の名稱を以て區別することは、絶対に必要であると云はねばならぬ。總ての社會に於ける殆んど凡ゆる下層階級の人々は、何等かの方法に於て雇傭せらるゝのである。而して若しも國富に及ぼす彼等の效果に關して彼等の職業を區別す可き論據が一もなしとすれば、何れが資本に附加せらる可き収入を節約して使用せられたるものなりや、之を考ふるのは至難である。何となれば右の假説に従へば甲の種類と乙の種類との間に何等の本質的相違もない場合には、乙の種類に屬する人々に先立ちて甲の種類に屬する人々を雇傭するに過ぎないであらうから。

然らば吾々は、節約の本質と、國民的資本に及ぼす吝嗇並に浪費の別異なる影響とを如何にして説明す可きであるか。現今の經濟學者は、一人も節約することの意義を單に蓄積することであるとなし得ない。而して此の狭量無効なる仕方以上に、國富に關して節約なる語の使用は充分に想像せられ得ないのである。併し節約せらるゝものゝ別異なる適用に基づいて生ず可きものは節約に依て維持せられ得可き各種の勞働の間に於ける眞の區別の上に確立せられるのである。(T. R. Malthus, Principles of Political Economy, considered with a view to their practical application, 1820, pp. 31-32.)

右の二個の理由に基づいてマルサスは、スミスの生産的及び不生産的勞働なる區別を支持したのである。斯の如き見解を支持する以上、マルサスが自己の與へたる富の定義——富とは人

類に取て必要、有用、且快適なる物質的對象を云ふ(ibid. p. 28.)——に満足することの出來なかつたのは當然である。何となればマルサスは總ての勞働を生産的と呼ぶ方針を固執する價值があるを考へたからである。但し總ての勞働が生産的であるとは云へ、「若しも富の意義を手に觸れ得可き物質的物件に限定せずとすれば」其の生産的なる程度に相違のあるのは無論のことである。(ibid. p. 38.)而してマルサスの見解を以てすれば、農業勞働が最も生産的なるは地代利潤、及び賃銀を生ずるからである。農業勞働に次ぐものは、利潤及び賃銀を生ずる、資本に依て幫助せらるゝ他の勞働である。然らば最後に來るものは何ぞやと云ふに、是れはアダム・スミスの所謂不生産的勞働である。何となれば是れは單に賃銀を生ずるに過ぎないからである。然るにマルサスは、彼自身の斯る提唱を棄

却して居る。其の理由は如何と云ふに、右に提唱せる事實は、生産物の性質に基づかずして、或る特定種類の努力に對して支拂ふ可き事情をして其の勞働が生産的なりとの標準たらしむるからである。(ibid. p. 41.)併し是れは、聊かマルサスの考へ過ぎたる所である。次にアダム・スミスの「國富論」を一八二八年に校訂出版したるジョン・ラムゼイ・マッカロックは、其の出版に先立ちて一八二五年に公刊せる「經濟學原理」(Principles of Political Economy, with a Sketch of Rise and Progress of the Science, 1825.)の末尾に於てアダム・スミスの生産的及び不生産的勞働説を猛烈に攻撃したのである。即ち彼の曰く

「先づ第一にスミス博士の最も顯著なる例證の奴婢より云はん。スミス博士の所説に依れば、奴婢の勞働は賣却し得可き財を生産せざる

が故に、不生産的たるに反して、製造業者の労働は賣却し得可き財を生産するが故に、生産的である。併し製造業者の労働が眞實に生産するものは何であるか。彼等の生産物は、専ら社會の使用及び便宜のために必要とせらるゝ慰安品と便宜品とより成るに非ずや。然らば製造業者は物質(matter)の生産者に非ずして、單に效用(utility)の生産者である。而して奴婢の労働も、亦效用を生産するの事實は明白ならずや。即ち通常承認せらるゝ所に依れば、穀物、牛肉、及び他の食用物品を耕作供給する農夫の労働は、生産的である。果して然らば、是等の物品を調理して食用に適應せしむるに必要と可らざる仕事をなす奴婢の労働は、何故に不生産的と看做さるゝのであるか。是等二種の勤務の間には何等の相違もない——換言すれば是等の労働は何れも生産的であるか、若くは不生産的であるか。

——と云ふことは論證を待たずして明白である。例へば火力を生せしむるためには、炭坑より地上へ石炭を運ぶと同様に、穴藏より火床へ石炭を運ぶことが何よりも必要である。若しも此の場合に炭坑夫は生産的労働者である、と云はるゝならば、同じく火力を加減するに雇傭せらるゝ奴婢の労働も亦生産的であると、呼んではならぬことあるまい。……一體凡ゆる人間の努力の目的は何れも同一である。詳言すれば必需品、慰安品及び享樂品の總額を増加せしむるにあるのである。而して各人は、是等の慰安品の幾何額をば奴婢の勤務なる形態に於て所有し、又幾何額をば物質的生産物の形態に於て所有するかを決定することは、各人の判断に委せらる可きである」。(Ibid. pp. 406-407)云々。

では未だ充分ならずとすれば、吾々は最後に之が解決をナッソー・ウヰリアム・シニオアー(William Senior)の斷案に待たなければならぬ。

三十一

シニオアーは、一八三六年刊行の「帝都百科辭典」(Encyclopaedia Metropolitana)の「經濟學」なる項目を執筆したるが、其の叙述の中にアダム・スミスの所謂生産的労働の生産物と不生産的労働の生産物との間に於ける相違を極めて巧妙に説明して、其の相違たるや大方用語の問題に過ぎぬと斷じて居る。今彼の要旨を窺ふに、

「通常生産物は、物質的と非物質的との二種に分たるゝものである。或は他の語を用ひて財及び勤務(commodities and Services)と稱せらるゝのである。此の區別はアダム・スミスの有名な生産的労働及び不生産的労働の分類に暗示せられたるものゝ如くである。即ち斯る分類の原

理を便宜と考へる人々は、之と同時に若しも其の労働がなければ總ての他の労働が無効となる可きが如き労働を指して、不生産的と名付くるの困難なるを感じて、其の成果を表現するに勤務又は非物質的生産物なる術語を發明したのである。

然るに生産的労働と不生産的労働との間、若くは物質的生産物と非物質的生産物との間、又は財と勤務との間に設けられたる區別は、即ち吾々の考慮の諸對象たる諸物件其物に現存するには非ずして、反對に吾々の注意を惹付けらるゝ等物件の様式に現存する所の差違に基因するものゝ如く、吾々には見ゆるのである。即ち専ら吾々の注意が其の變化を惹起したる行為に差向けられずして、其の行為の成果、換言すれば變化したる物件に差向けらるゝ場合には、通常經濟學者は、其の變化を惹起したる人を呼ぶに、

生産的労働者換言すれば財若くは物質的生産物の生産者なる名稱を以てするのである。

他方に於て吾々の注意が變化したる物件に差向けらるゝに非ずして、其の變化を惹起す行爲に差向けらるゝ場合には、通常經濟學者は其の行爲を惹起したる人を呼ぶに、不生産的労働者なる名稱を以てし、而して彼の努力をば勤勞。又は非物質的生産物と云ふのである。例へば靴屋は皮革を變化せしめ、之を縫合せて、遂に之を一足の靴となすのである。次に靴磨工は、此の汚れたる靴を磨いて、綺麗なる一足の靴となすのである。第一の場合に吾々の注意は、専ら變化せられたる物件に差向けらるゝのである。故に靴屋は靴を製造する、即ち靴を生産すると云はれる。之に反して靴磨工の場合に吾々の注意は、専ら仕遂げられたる行爲に差向けらるゝのである。從て靴磨工は、財を製造する、即ち財

が投せられたる主體である。例へば假髮又は藥箱を購買する場合の如し。然るに他の場合に吾々の購入するものは、通常變化せられたる物件に非ずして、其の物件を變化する労働である。例へば理髮師又は醫師を雇備する場合の如し。總て是等の場合に於ける吾々の注意は、自ら吾々が通常購買す可き物件其物に差向けらるゝのである。詳言すれば吾々の通常購買するものは労働なりや、將又其の労働の投せられたる物件なりやに從て、——即ち實際に吾々の購買するものが財なりや、將又勤勞なりやに從て、吾々は財若くは勤勞をば生産されたる物件と考へるのである。」(ibid. p. 52)

斯く論じたるシニオアーは、最後にマッカロックの用例に從て炭坑夫の労働と、石炭を應接室に運ぶ僕婢の労働との比較を試みたるも、夫れは單にシニオアーが自己の結論を抽出するために

を生産すると稱せられない。何となれば靴磨工は、靴を綺麗にするのではなくして、靴を綺麗にする勤務を仕遂げるが故である。勿論何れの場合に於ても一の行爲と一の成果とがある。併し一方の場合には、吾々の注意が主として、其の行爲に差向けらるゝに對して他方の場合には、吾々の注意が専ら其の成果に差向けらるゝと云ふ丈の相違はある。」(Political Economy, 800 ed. pp. 51-52.)

而してシニオアーに依れば、吾々の注意が専ら行爲に差向けらるゝや、將又成果に差向けらるゝやは、即ち變化せらるゝ物件が依然として同一の名稱を受く可きや否やの問題、及び支拂はるゝ様式に依存すと云ふのである。今彼の解説を左に摘記しやう。

「或る場合に生産者の賣却して吾々の購買するものは、通常彼の労働に非ずして、其の労働借用したるものにして、毫もマッカロックの提言に賛成するがためではなかつた。即ち「消費者は、炭坑より採掘せられて自己の穴藏に持運ばれたる場合に石炭其物に對して支拂ひ、又其の石炭を應接室に持運ぶ僕婢の行爲に對して支拂ふのである。故に炭坑夫は物質的財たる石炭を生産し、又僕婢は非物質的生産物たる勤勞を生産すと云はれる。乍併事實に於て兩者は同一の事柄をなすものにして、即ち石炭なる物質の現在の状態を變更するに外ならない。而も吾々の注意は、一方の場合には其の行爲に差向けられて、他方の場合には其の行爲の成果に差向けらるゝのである。」(N. W. Senior, Political Economy, 1872, 6th edit., pp. 52-53)

斯く生産的労働及び不生産的労働に就て論述したるシニオアーは、前記のジュエイムス・ミルの分類を踏襲して、生産的消費及び不生産的消



費なる區別をなしたのである。シニオアーは先づ「一國の富は其の住民が生産的消費を選ぶか、將又不生産的消費を求むるかに依存す」と提言して、之より左の如く生産的消費及び不生産的消費に言及したのである。

即ち(イ)生産的消費とは、遠き將來の生産物を生産するが如き財の使用を云ひ、又

(ロ)不生産的消費とは、何等遠き將來の生産物を生産せざるが如き財の使用を云ふ。

而して不生産的消費の特長は、消費者自身の享樂以外に何人の享樂にも附加せらるゝ所がないのである。不生産的消費が社會の他員に及ぼす唯一の影響は、他員の使用に充當せられ得べき財の數量を夫れだけ減少せしむること、是れである。或る財は不生産的消費にのみ使用せられる。例へばレイス、刺繍、寶玉、其の他の個人的使用に供せらるゝ裝飾品を始めとして、一

三十一

然るにシニオアーは、生産的及び不生産的消費なる分類に關聯して通常區別せらるゝ生産的消費者及び不生産的消費者なる分類に同意しなかつた。勿論彼の言へる如く、生産的消費者と不生産的消費者 (productive and unproductive consumers) との間に於ける區別は、如上の生産的消費と不生産的消費との間に於ける區別の如くに明確ではない。元來一般の人間を分ちて生産的消費者と不生産的消費者となすは、誤まれる區別である。何となれば社會には、其の何れにも屬せざる人間があるからである。今或る人の消費が彼の生産に缺く可らざるものなる限り、

彼は生産的消費者であり、又然らざる限り、彼は不生産的消費者である。故にシニオアーの分類を以てすれば、(一)單純なる不生産的消費者とは自己の消費せるものに對して何等の報酬を

一般の酒類、煙草等の如し、之に反して大多數の財は、生産的使用にのみ充當せられて——或る誤用の場合を除けば——一般に不生産的に消費せらるゝことは毫もないのである。例へば總ての道具、鋤、筏、蒸汽機關、大商船等の如し。併し財の一般性は、所有者の意思に從て、或は生産的に或は不生産的に使用せらるゝことであらう。換言すれば或は破壊せられたるもの、代り或る生産物を代替するが如き目的を以て、或は其の使用に伴へる直接的快樂以外に何等の有益なる成果を齎らざるが如き目的を以て消費せらるゝであらう。人間の生存を維持し得べきものは、悉皆(一)生産者若くは(二)非生産者の維持に使用せらるゝであらう。即ち(一)の場合を稱して生産的に消費せらるゝと云ひ、又(二)の場合を稱して不生産的に消費せらるゝと云ふのである。 (ibid. pp. 54-55)

も齎らざる人を呼ぶのであり、又(二)單純なる生産的消費者とは何等餘分に消費せざる人を云ふに過ぎないのである。以下シニオアーの説を一層明瞭ならしむるために、私は若干の説を附加しよう。

(イ)先づ第一に擧ぐ可き不生産的消費者階級は、彼等自身の既往の努力に依て、又は贈與若くは相續なる偶發的事實に依て供與せられたる場合に、彼等の収入と閑暇とを單なる享樂的目的に供して満足する人々である。乍併斯る人々は、如何なる状態の社會に於ても決して多數を占むるものではない。即ち人智未開なる社會、從て又貧困なる社會に於ては、何等の努力もせずして其の生活を維持する人々は、必ず少數者に限られる。又文明國民の間に於ては集積、權力、榮譽、及び占有に對する慾望、並に其の多少に係はらず廣く有用なる高貴の欲求は、總て

吾々の人間性に於ける遅緩なる諸原理に甚だしく逆ひつゝあるのである。而して財産は漸次安固となり、權勢に對する大道は公開せられ、功績と富とは出生の偶發的事實以上に一般的に評價せられ、健全なる宗教の影響は、人々に「人間は利己的快樂若くは無用なる滅慾より遙かに優秀なる諸目的のために創造せられたるなり」と云ふことを教込むに至れる等、事實上今日の文明は大いに改善せられ居るが故に、有意的努力に對する總ての動機は、大いに其の勢力を得て居るのである。勿論無爲に生活するやも知れざる人々の數は、増加するには相違ないけれども、不幸にして其の特權を充分運用し得ざる人々の割合は、減少して居る。

(ロ)次に位する不生産的消費者階級は、其の生活が單に他人よりの劫掠若くは慈善に依てのみ維持せらるゝ人々より成るのである。併し却つて云へるは、兒童及び一時的無能力者を除外するためである。勿論斯の如き兒童や無能力者は、毫も直接的報酬を齎らすものではないけれども、彼等を維持することは、彼等の將來に於ける勤勞の必要條件である。所謂不生産的消費者の最大多數は之に屬するものにして、又思ふに相對的減少を被むらざるものである。何となれば疾病、怪我等を除去するに役立つ諸原因は、亦夫等の結果が不治なる場合には生命を伸長せしむるに役立つからでもある。併し一八二五年七月五日に發表せられし英國下院の友愛組合に關する報告第四卷中の統計に依れば、英國に於ける如上の階級は全社會成員の約二分五厘にも及ばないと考ふるを至當とする。(The House of Commons' Report on Friendly Societies, 5th July, 1825, vol. iv.)

(二)然るに絶對的生産的消費者、詳言すれば

掠に依て生活する人々の數は、明かに文明の進歩と共に減少する傾向がある。之に反して乞食に就ては、或る餘剰の富が其の存在を必要とするやうに思はるゝが故に、多少疑問の餘地があるらうし、又乞食を扶持する餘剰物の増加する事實は得て推定せられ勝ちであらう。元來幾多の法律は其の制定に宜しきを得ず、又其の施行に正しからざる所あるが故に、乞食の増加を許容するものであると、吾々は自身の經驗より知るのである。併し商業的並に都市的立法の賢明なる制度の下に於ては、屈竟なる貧民の數は實際上重大視せられざる程に減少するかも知れないと云ふことを疑ふ點に就ては、一も其の理由はないと思はれる。

(ハ)最後の不生産的消費者階級に屬するものは、其の老弱及び不具等の事實よりして永續的に生産し得ざる人々より成るのである。今亦此の再生産の目的にのみ消費する人々の數は、遙かに僅少である。奴隸制度若くは之に類似せる諸法規の存在せざる國に於ては、何等か斯の如き階級が発見せらるゝや否やは、眞に一個の疑問であらう。即ちかの最も卑賤なる勞働者と雖も彼の健康と精力とに必要なる費用を多少ながら所持するものである、故に斯の如き國に於ては、嚴密に其の必要物以外に何物をも與へられざるものは何ぞやと問はゞ、夫れは家畜であるとの答を得る。之に反して人間が一の家畜と考へらるゝ諸國に於ては、奴隸は家畜と等しく制限せらるゝと考へられないこともない、併し如何に奴隸なりと雖も、彼も一般には或る種類の私有財産を獲得するものにして、而も是れは彼の日常生活資料が幾分彼の慾望に優るものなることを意味するのである。

如上の分析に依れば、元來社會の大多數者は

生産的消費者でもなければ、又不生産的消費者でもないけれども、差當り生産的か若くは不生産的と考へらるゝ彼等の費用の割合に従て、或は生産的消費者ともなり、或は不生産的消費者ともなり得ると思はれる。例へば農夫に就て云へば、彼が最も費用の少なき食料を以て満足し、最も單純なる衣服を以て充分満足し、又四季を凌ぐに足る廣さと設備とある住家を以て満足する限り、農夫は生産的消費者である。併し彼の煙管、燒酎、一般的に云へば麥酒、身體及び住家の貧弱なる裝飾品等は彼の不生産的消費を構成するものである。

勿論吾々は、單なる必需品以上に及ぶ總ての個人的支出が必ず不生産的であると斷ずる積りはなし、一體社會の上層階級に屬する人々の義務は、彼等が殷富を多少なりとも誇示することによつて下層階級の人々の尊敬を收むる場合を除

けば、先づ充分に履行せられ得るものではない。例へば若し判事や大使が其の地位上一年二千磅に値する邸宅を構へざる可らざる場合に、四千磅を費するとせば、彼の消費の半ばは生産的なるも、他の半ばは不生産的であらう。乍併彼の馬丁は馬に取て無用の重量であるに過ぎないからとて、彼をば不生産的消費者と考へるならば、夫れは大なる誤謬であらう。即ち馬丁の消費するものは彼の賃銀にして、少なくとも彼が馬丁としての勤務を遂行するために彼の賃銀を消費する限り、彼は生産的消費者なるが故である。併し不生産的に消費せらるる物件は何ぞやと云へば、夫れは馬丁の勤務にして、彼の勤務は彼の主人に依て消費せらるゝのである。然るに他方に於て生産者其人に依ての必需品の消費は總て生産的消費である。又其の勞働の價値が一年十磅に過ぎざるに、彼の消費が一年二十磅に上

る所の、半ば雇傭せらるゝ貧民は、其の差額即ち十磅を不生産的に消費するものと謂ふ可きである。(N. W. Senior, Political Economy, pp. 54-57.)

斯く説きたるシニオアは、更に資本の用途上より左の如き區別を試みたのである。即ち彼に依れば資本は、其の適用せられ得べき目的に従て再生産的資本(Reproductive Capital)單純なる生産的資本(Simple Productive Capital)、及び不生産的資本(Unproductive Capital)に區別せられる。

(イ)再生産的資本とは、使用物品と同様なる物件の生産に使用せられ得べき富なる總ての物品を云ふ。例へば總ての農業上の貯藏物品の如き、又人生の凡ゆる必需品の如し。その他炭坑に於ける蒸汽機關の火爐中に投せられたる石炭の如きも亦然り。

(ロ)單純なる生産的資本とは生産要具には相違なきも、使用物品と同種なる物件の生産に使用せられ得ざる富なる物品を云ふ。例へばレイス機械の如き又生産的に消費せられ得ざる物件の生産に使用せらるゝ總ての道具及び機械其物の如し。

(ハ)不生産的(若くは分配的(distributive))資本とは、不生産的使用に充當せらるゝものなれども、其の窮極的消費者たる可き人々の財産とならざる財を指すのである。思ふに文明社會に於て生産せらるゝ財の大部分、否其の價値の大部分は、其の財の最初の生産に際して此の不生産的資本となるのである。

既に述べたる如く、如何なる社會状態に於ても、絶對的不生産的消費者及び絶對的生産的消費者の數は僅少であるが、殊に後者は甚だ僅少である。併し富の増加すると共に各人の不生産

的消费も亦増加するものにして、其の結果は遂に全社會に於ける不生産的消費の全量が、生産的消費の全量を超過するであらう。否、往々然るのである。若しも吾々が富裕なる都市の店頭を瞥見するならば、單なる享樂に資せらる可き財が、更に生産に資せらる可き財を超過すること多大なるを見るに相違ない。此の説明は注意を要する。(op. cit. pp. 66-67.)

二十三

以上に於てシニオアーが生産的及び不生産的なる語を使用せる要領を摘記したる積りである。然らば彼に續く者は何人なりや。此の間に對しては吾々は、躊躇なくジョン・スチュアード・ミル其人であると答ふ可きであらう。勿論年代順に云へばシニオアー及びミルの二者に先立ちてトーマス・チャーマーズ(Thomas Chalmers)を擧げなければなるまい。何となれば

彼は一八三二年「經濟學」なる一書を著して、生産的勞働説を單に科學の見地より考察して不完全に看做せるのみならず、又實際上より觀て有害と斷じたからである。尙ほ彼の所説の一端に於て彼が、生産的勞働なる語をば物質的對象を生産する勞働に限定することに反對せる場合に、彼自身の如き自由職業勞働者——彼は當時エジンバラ大學の神學教授であつた——の除外せらる可きを主張したる點は特に注目に値する。(T. Chalmers, On Political Economy in Connection with the Moral State and Moral Prospects of Society, Glasgow, 1832, Ch. xi, ad init.)

乍併チャーマーズが生産的及び不生産的勞働の區別の不完全有害なるを主張したるにも拘はらず、ジョン・スチュアード・ミルが一八四四年に「經濟學上未定の諸問題」を、又一八四八年に「經濟學原理」を公刊して、前者の第三論及び

後著の第一編第三章に於て生産的及び不生産的勞働、並に生産的及び不生産的消費を詳述提唱するや、再び多くの英國經濟學者が彼の所説を採用するに至つた事實は何人も之を否定し得ざる所であらう。而してミルの經濟學説の普及者としてフオーセト夫妻(Henry Fawcett, Manual of Political Economy, 1863, Bk. I, ch III; and Millicent Garrett Fawcett, Political Economy for Beginners, 1870, Sect. I, ch. II.) サイマス(Rev. J. E. Symes, Political Economy, pp. 25-26) ニコルソン(Joseph Shield Nicholson, Principles of Political Economy, 1893-1901, 3 vols.; Elements of Political Economy, 1903) 等を得たることは、生産的及び不生産的勞働説、並に生産的及び不生産的消費説が能く現代に迄も其の支持者を見出し得たる最大理由であらう。

勿論他面に於てはカーアーンズ(J. E. Cairnes,

Some Leading Principles of Political Economy, 1874) シュジャンス(W. S. Jevons, Theory of Political Economy, 1871.) シチサンキソン(H. Sidgwick, Principles of Political Economy, 1883.) 等の權威ある經濟學者は、此の生産的勞働説及び生産的消費説に關しては多くを語らぬか、若くは全然口を緘するの態度を持せる者である。少なくとも彼等の主要なる著書(前掲)中には是等の學説に言及せる所を見ないのである。但し其の中シジャンスのみは、ヘンリー・ヒックス氏編纂の「シジャンス遺稿經濟學原理」中に生産的勞働説を取扱つて居る。(Principles of Economics, by W. S. Jevons, edited by H. Higgs, 1905, pp. 85-89) 依て彼の見解を簡單に窺て、最後に是等の學説に對する現代經濟學者の賛否を聞いて本稿を結ぶ積りである。(以下次號)